

地震の発生 二〇〇九年一〇月十八日（日曜日） 午前七時五十六分
震源地 新潟県中越地域
地震の規模 マグニチュード六・八
山古志地区の震度 六強
最初の場面となる場所 梶金地区一時集合場所（集落センター）
気温 約十五度 くもり
課題 発生直後の集落内での安否確認

【ストーリー】

状況設定（ナレーションも可）

ある秋の休日、午前八時ごろ、新潟県長岡市山古志に直下型の地震が発生する。

山古志の震度は六強。山古志の五十嵐雄一さん宅では、奥さんと居間でくつろいでいた。娘はイベントのため小学校へ。五十嵐さんは地区の区長さんや防災担当者達と協力し、災害発生当日を乗り切っていく。

第1話 登場人物（イメージ） 役割・立場

- ・五十嵐雄一（男性：お父さん） 梶金地区の住民。防災会では初期消火班員
- ・五十嵐まみ（女性：小学生） 雄一の娘。山古志小学校に通う小学生
- ・五十嵐恵美子（女性：お母さん） 雄一の妻。防災会では炊き出し班
- ・五十嵐マツ（女性：おばあさん） 雄一の母。足が不自由で寝たきり
- ・星野（男性：防災会長） 梶金地区の自主防災会長。衛星携帯電話を設置
- ・長島（男性：梶金地区区長） 梶金地区の区長。地区の最高責任者
- ・避難者男A：梶金地区の住民。火事の第一発見者
- ・避難者男B：梶金地区の住民。火事現場近くに住んでいる
- ・避難者女C：近所の一人暮らし老人が見当たらないのを心配している
- ・間島（初期消火班）：梶金地区の住民。初期消火班員
- ・斎藤（初期消火班）：梶金地区の住民。初期消火班員

解説（ナレーション：毎回共通）

独立行政法人・防災科学技術研究所では、災害時に地域に起きることを住民主体で考えるための方法として、地域の災害シナリオの作成を提案

しています。災害シナリオは、行政が作成した各種災害の被害想定やハザードマップを下敷きにして、地域の「より細かい事情」を勘案して、災害時に実際に起きることを時間に沿って具体的に整理して記述したものを指しています。災害シナリオは、地域の関係者が具体的に自分たちの直面する事態を考える仕組みづくりのきっかけとなるものです。シナリオにすることで、事態の展開していくイメージが掴みやすくなり、必要な対応もわかりやすくなります。

注意（脚本内の青文字は状況説明のための記述であり、読まない）

【オープニング】奥さんとテレビを見ながら朝食を取っている

五十嵐恵美子：ほらっ、早くしないと遅れるわ

五十嵐まみ：はあい、じゃあ、いつてきまあす

五十嵐雄一：おう、気をつけてな

五十嵐恵美子：もう、ほんっと、ねぼすけなんだから

五十嵐雄一：まみは今日学校か？

五十嵐恵美子：震災五周年の記念ラジオ放送を小中学校から生放送で中継するんだって

五十嵐雄一：震災五周年か・・・もうそんなに経ったかなあ

五十嵐恵美子：そうらね、あの時はまみがまだ幼稚園だったもの

五十嵐雄一：学校での式典ってどんなことやるんだろかね

五十嵐恵美子：これまで助けてくれた人たちにまみ達が合唱してあげるんだと

五十嵐雄一：おお、いいことらねか

五十嵐恵美子：もう起きんでほしいて

五十嵐雄一：まったくら

五十嵐恵美子：今日は天気がいいっけ、裏の畑仕事でもするかね

五十嵐雄一：そうらな、来週は寒くなりそうらっけな

朝食後、居間でくつろぐ雄一と恵美子。

恵美子が新聞紙を片づけようと立ち上がった瞬間、突然地震が起き、ガタガタと揺れる振動が強くなる。

周りを見回す雄一と恵美子・・・。

すると次の瞬間、ごーつという音とともに家が大きく揺れ始める。電気が切れ、部屋の中の物が落ちてくる。恵美子は立っていられなくなり、新聞紙を落としてながら倒れこむ

五十嵐雄一　：うわっ、地震だて！

五十嵐恵美子　：きゃっ（倒れる）

ガチャンというガラスが割れるような音、何かが落ちたようなドシンという音。20秒位の効果音。その後シーンとする

五十嵐雄一　：おい、大丈夫らか

五十嵐恵美子　：ああ、なんともねえみてえら

五十嵐雄一　：かなりでっけえ地震だった。でも前回よりはたいしたことねえみてえらな

五十嵐恵美子　：食器が崩れて壊れたみてえらけど・・・建て直してよかったて

五十嵐雄一　：耐震設計よくできてるっけん。おお、ラジオで何か言ってるかもしれないねえ

すると、居間のタンス上に置いてあった緊急災害ラジオから放送が流れる

緊急災害ラジオ　：（ピンポンパンポン）こちらは長岡市役所です。午前七時五六分、新潟県中越地方で地震がありました。この地震により山古志支所で震度六強が観測されました。山古志支所では災害対策本部が設置されます。各集落の担当者は八時一〇分までに衛星電話による緊急連絡網の開設を準備してください。

五十嵐雄一　：また地震か、いやあ、まいったな

家の奥の間にいるおばさんに向かって叫ぶ

五十嵐雄一　：おい、ばあちゃん、大丈夫らか、地震だってや、これから避難するれ、母さん、ばあちゃんの車いす用意してくれて

車いすを用意。おばあちゃんを乗せる

五十嵐恵美子　：ばあちゃん、しっかりの、すぐ連れてぐすけ

五十嵐雄一　：おお、母さん、そういえば防災訓練でやった黄色いハンカチも
つてきてくんねろか、あれ玄関につけんと。

五十嵐恵美子　：避難完了の合図だったっけね、わかった。

五十嵐雄一　　：避難の準備は俺がしとくっけ、すぐに出ようれ

黄色いハンカチを避難完了の目印として玄関につけ、車いすに乗せたおばあち
やんを連れて外へ出る。

五十嵐さんがおばあちゃんを車いすで避難支援する

五十嵐雄一　　：ばあちゃん、下り坂なんだ、後ろ向きにするれ。大丈夫らっけ

五十嵐マツ　　：おっかねーて、頼むすけ前向いてくれて

五十嵐雄一　　：母さん、ばあちゃん前のめりになると悪いっけ、前を押さえて
くんねろか

五十嵐恵美子　：まみは大丈夫だろか、心配らて

五十嵐雄一　　：避難場所に行けば何らかの通信ができるて。とりあえず行つて
みようと

おばあちゃんを前向きにさせて下り、避難場所へ向かう

梶金地区の一時集合場所にも多くの住民が集まってきた。時折余震がやっ
てくるので、皆口々に不安を訴えている。

集落センターでは自主防災会長が衛星携帯電話を設置していた。

星野（防災会長）　：たしか東側だったような気がするろも

長島（梶金区長）　：南側だったれ、たしか。マニュアルは無いのか

星野（防災会長）　：見ても解らんれ、そこらじゅう探したろも見つからんし

長島（梶金区長）　：いろんな方向に向けて電波のいい方向探してみようと

そこへ住民がかけつける

避難者男A　　　：区長さん、大変だて、火事らて、消防倉庫のあたりで煙が

出てたて

避難者男B　　　：おお、おらも見たて、あの辺だと、松田さん家の作業小屋
が燃えてるて

住民は口々に騒ぐ。

長島（梶金区長）：こりや大変だ。早く人集めて消さんと

星野（防災会長）：みんな消火に行ってしまったら、ケガ人とか行方不明者とか情報が掴めなくなるて

長島（梶金区長）：そうらな。役割分担して指示出そう。星野さんは俺が指示出したところで手薄なところ手伝ってやってくれて。初期消火班が人少ねっけ、そこ頼むわ

星野（防災会長）：よし。先に初期消火班を呼んで消火活動指示させるて。「初期消火班、集まってください。松田さん家車庫付近で火事があつたみたいだて。」

五十嵐雄一：おお、おれ初期消火班だて。松田さん家は消防小屋が近いすけ、すぐに水出せる。あとの初期消火班は間島と斎藤だて。俺が声かけて集めてすぐに向かうて

五十嵐雄一は初期消火班二名と一緒に消火に向かった。区長は避難している住民に役割分担を呼びかける

長島（梶金区長）：皆さん聞いてください。これから皆さんに割り振られている役割を言いますんだ、別れてそれぞれ分担ごとの長の指示にしたがつてください。「組長さん」「避難誘導班」「情報伝達班」「給食給水班」それぞれ集まってください。

住民はざわつきながらもそれぞれの役割の所へ集まり、相談し始める

星野（防災会長）：これから梶金地区住民の安否確認をします。ええと、まずケガ人はいるか確認・・・あ、いや、まずいない人は誰かわかりますか？

それぞれ住民がバラバラで報告し始めて収集つかなくなる

星野（防災会長）：ああ、申し訳ねえ、組長さんがまとめて報告を・・・
長島（梶金区長）：星野さん、落ち着いてください。俺が確認しますんだ。これから梶金地区住民の安否確認をします。これから組長さんがそれぞれ点呼しますんだ、手をあげて応えてください。

家族で誰かいない人は、誰がいなか組長に報告してください。

住民は組長の指示にしたがい、整列する。組長がそれぞれ安否を確認する

五十嵐恵美子：子供が学校に行っているんだろも、何にも連絡できねえ。

避難者女C　：末松さんがいないみてえら。町へ行くって聞いてたからいないはずだ。それと一人暮らしの淳さんがどこいるかわからんて。家のぞいてみたらも、電気は止まってるみてえだし。声は聞こえなかった。心配らすけ、誰か見に行ってくんねるか。一人じゃ出らんねはずだすけ。

避難者男A　：山古志トンネルの手前で土砂崩れがあって行かんねえらしい。

避難者女C　：それじゃ竹沢や支所に行かんねえか。

小さい集落のため、みんなお互い知っている。誰誰さんはどこどこに行っているなどという情報が飛び交う。

各組長が区長へ報告する。区長は各班に指示を出す。

長島（梶金区長）

：みなさん、それぞれ皆さんの情報をまとめて、おおよその全体の状況がわかってきましたのでお知らせします。この地区の電気は全部止まっています。水道も断水しているようなので、最初は出てもずっとは出ません。これからは集落センターを本部とし、二三日は自活できるようにします。くれぐれも余震には気を付けるように。

避難誘導班は一人暮らしの淳さん宅へ向かい、安否確認をしてください。淳さんの点検終了後は、各戸で避難完了しているか確認してください。黄色のハンカチが目印です。

情報伝達班は、竹沢集落以外の方面の道路閉塞状況を確認する。必ず二人組で行動するようにお願いします。

残った人は給食給水班と協力し、昼食の準備に取り掛かるようにしてください。以上です。

そこへ先ほど設置していた衛星携帯電話から発信音が聞こえてくる

長島（梶金区長）：「はい。こちら梶金地区集落センター区長の長島です。・・・はい？聞こえねえて。なにね？声が小さくて聞こえねえて。」

松田（支所職員）：「こちら山古志支所災害対策本部です。そちらの被害状況を報告して・・・」

星野（防災会長）：「ポリウムじゃないだろうか。このつまみを・・・どうら？

長島（梶金区長）：「ああ、ちよつとは聞こえるも・・・あの、ほとんどの住民は避難してきているろも、子供たちは学校らんだ、確認がとれねえ。どうだ？無事らるか。それから松田さん家の倉庫が火事で消火に・・・」

松田（支所職員）：「この衛星携帯電話は、各地区の被害状況を定時に報告してもらいます。緊急の用件以外はそちらからかけることのないようお願いします。今はまだ報告はしなくても結構です。

一時間後に電話するので、それまでに定時連絡票を使って報告できるように準備するようにおねがいます」

長島（梶金区長）：「とにかく消防車庫のあたりで火事なんだ。消火の救援と山古志小中学校の生徒の安否確認を要請しますて。・・・それから・・・」あっきや、切られたて。それからこの衛星携帯電話だけど、これ、地面に置くと話しづらいんだ、机持ってきてくんねるか。

星野（防災会長）：「この電源は充電式らっけ、どっから充電できる電源探してこねえと。あ、そうだ車から取れるて。この近くの興志宗さんところから車を持つてくるように誰か頼んできてくんねるか。

長島（梶金区長）：「このソケット式のライターでどうらるか。・・・あきや、ソケットに端子が入らねえ。だめだ

一方、倉庫の火災消火に向かった五十嵐雄一たち初期消火班は、火災現場近くの防火倉庫へたどりつく

五十嵐雄一：よし、防護服を乗せたら消防車に乗り込むぞ

出発。サイレンを鳴らしながら走り現場へ到着。

五十嵐雄一：よし、消火栓にホースをつなげるぞ

斎藤（初期消火班）：ダメらて、消火栓のバルブがきつーい

五十嵐雄一：ホースがまっすぐ伸びてねえぞ。

間島（初期消火班）：なかなか水が出ないぞ。発電機の出力が低いな。どうしたらいいんだ

五十嵐雄一：おっ、出てきた。勢いも出てきた。最初は出が悪いんじゃないだろうか

斎藤（初期消火班）：母屋じゃないな。倉庫だ。でももし中に人がいたら大変だ。火が消えたら中に入って確認しようて

間島（初期消火班）：柱も焼けているからむやみに入るのは危険じゃないだろうか。精米機のボイラーが原因だろう。

倉庫の火が消える。どうやら火は完全に消えたようだ。

五十嵐雄一：消えたぞ。どうする？念のためまだ水をかけるか？全焼だけど柱はまだ残っている。入っても危険じゃないだろう

間島（初期消火班）：ボイラーの所が一番燃えている。ボイラーの故障が原因だ。

斎藤（初期消火班）：どうやら誰も中にはいなかったようだな

五十嵐雄一：いやあ、良かった。松田さんとこの玄関に黄色いハンカチがあった。全員避難したってことだ。よかったなあ

間島（初期消火班）：いやあ、バルブは開かんし、どうなる事かと思った

よかったよかったと胸をなでおろす三人。初期消火とはいえ全焼だったがケガ人や死傷者がいなくて一安心する。

五十嵐雄一：よかったるも、うちのまみも小中学校いったまんま連絡がとれねえんだて。心配なあ。

娘のまみを心配する五十嵐雄一。妻の恵美子も給食給水班の手伝い作業をしながら心配するのだった。

（第1回終わり）

（クロージング：ナレーション）

このドラマは、住民をはじめ行政など地域のさまざまな関係者が協力して、災害時に想定される事態や対応について話し合い創作されたフィクションです。ドラマのシナリオづくりの過程では、地域社会の実態を調べ、かつ、行政の防災計画や防災体制、被害想定、ハザー

ドマップ、マニュアルなどの公式な情報を参考にしていますが、社会的なシミュレーションとして、また、今後の改善の視点を盛り込むなどの理由から、意図的に事実と異なる設定をしている場合があります。

本ドラマに関するご意見、ご感想などを、独立行政法人防災科学技術研究所、または [EN](#) 長岡までお寄せください。

地域防災ラジオドラマ 現状とドラマ（フィクション）との相違点

- 2004 年の新潟県中越地震は本ドラマの舞台である新潟県古志郡山古志村（現在の長岡市山古志地区）や北魚沼郡川口町に大きな被害をもたらしました。この地域は地すべり地形といって、斜面が滑動しその上にある構造物に大きな被害をもたらす可能性のある地形が至る所にあります。そこで震災後は非常に広範囲に土留めの工事をしたり、集落によっては集団移転をしたところもありました。今回、山古志地区では 2009 年 10 月の防災訓練をするための計画として、地域に起こりうる災害の種類や規模をワークショップで議論し、梶金集落では前回と同様の直下型地震が発生することを前提としたシナリオをベースに検討を行うことになりました。ただし建物やインフラ（道路やライフライン）は前回の震災後相当に改修・改善が進んでいますので、前回のような壊滅的な被害は出ないだろうという想定で検討することになりました。したがってドラマでは建物が全面的に倒壊するような被害や、地形が大規模に崩落するような被害は出てきません。しかし、屋内で住民が怪我をしたり、安否が不明で確認が容易でないシーンは登場します。これらはワークショップで議論された地域住民自身によるミクロな被害想定がベースとなっています。
- 中越地震の後、山古志地区ではすべての集落に衛星携帯電話の端末を配備しています。ドラマでは混乱を避けるため各集落からの通信が一定のルールを守ってかけられることを想定しています。実際に災害にあったときに、どの程度このルールに従って通信できるかは未知ですが、ドラマでは現状の通信体制が持つ限界も含めて、わかりやすい形で表現してあります。今後、中山間地における住民の安否確認の問題を考える中で、この課題を解決するさまざまな提案や工夫が出てくることを期待しています。
- また、第 3 話では、受話音量が小さい、充電端子が自動車のソケットに入りにくい、机が無く話しにくい、というシーンが登場します。これは、2009 年 10 月 18 日（日）に実施した震災対策訓練で、実際に起きたトラブルです。自動車からの充電の問題は訓練当日に解決しましたが、受話音量が小さいという課題は解決できず、訓練反省会で復唱ルールを作るという提案がありました。
- 支所と小中学校との連絡手段については、支所、小中学校共に課題であるとの認識しており、対策について検討しております。